

# 繪本のことば

東京高師教授 石井庄司

小學校就學前の幼兒を對象として作られた繪本、おもちゃ屋の店先に並んでいたり、驛の賣店にぶらさがつていたりする繪本、一體幾種類位出ているであらうか。まだ充分しらべていないのであるが、たまたま目に觸れたところのものについて考えてみても、相當いろいろの問題があるのではないかと思う。繪本だから繪が中心であるが、自分はいま、そのうちのことばの方面についてだけ問題としたい。

繪本のことばは、おもに母親を通して幼兒の耳に入るの  
で、直接幼兒が讀みとることは少いと考えられる。しかし幼稚園に進むころは、ぼつぼつ自分で讀みはじめるのであらう。實際、幼兒が自然に文字を習いとるのは、繪本によることが多いのであるから、繪本の文字は大事なはたらきをするわけである。

X X  
そこで、まず、繪本の文字のことを考えてみよう。これまでは繪本はみなかたかな書であつた。それが今度は、ひらがな書となつた。もうこの節は、かたかな書の繪本などは出ていないはずであるが、ここにひとつ問題となるのは、多くの

繪本は、かたかなを併用していることである。例えばアメリカとかアフリカという地名、コロンブスとかワシントンという人名、それからライオンとかカンガルーといった動物の名、ラジオとかボケットなどの外來語、そのほか、在來のものでも、動植物の名をかたかなにしたり、チュウチュウとかニャオニャオ、スイスイ、ゴロゴロといった擬聲語など、かなり多くのかたかな書が交えてある。なかには、ニッポンとかニホンというのまでかたかな書になつている。もちろん量的には、ひらがな書の方がはるかに多いのであるが、しかしひらがなだけしか知らない幼兒にとつては、讀めない部分があるところへあるわけであり、そのために、かたかなも覺えることになれば、相變らず二本だつてとなつて、幼兒の負擔は少しも輕くなつて來ない。

現行の小學校の教科書で、一年は「らじお」「ぼーいさん」「ぼけつと」「だいやもんど」と外來語もひらがな書となつて居り、「びかり」「しゆつしゆつ」など擬聲音もみなひらがな書にして、全くひらがな書一本で通してあるように、繪本も、ひらがな書一本だてが望ましいと思う。繪本の製作者が

まだ大人の立場にいて、本當に幼児のことを考えないからであらうと思われる。

X X

文字の大きさ、色などは、よほど注意されて來ているが、なお色刷の上に重ねて印刷されているため、非常に読みずらいもの、またはほとんど讀めないものもある。これは繪本にとつては、最も大事な繪そのものを臺なしにしてしまう結果となる。またそれを避けようとして、餘白だけを拾つて文字を印刷したため、ことばとしての続き方のわからないものが起つて來る。これは漫畫にとくに多いようである。普通の繪本でも、餘白の都合で、器械的に字數を制限するため、讀みにくいがある。例えばある繪本に

するとたまごを

わつてなかから

かわいいひよこ

がびーよびーよ

といつてとびだし

てきました

とあつた。はじめの二行はまず無難であるが、四行めからあとは、ほとんど意味が通じない。はじめの方も「すると」で一字分あけて、あとは、「たまごをわつて」と一行に續けて書くべきであらう。四行めは、必ず「かわいいひよこが」まで入れなければならぬ。次は「びーよびーよといつて」が一行「とびだしてきました」がまた一行となるわけである。

こういう書き方をした繪本のことばを讀んできかせるときには、ぜひ今のように改めて讀みとらねばならない。

國文法でいう文節の問題であるが、いわゆる單語としては「が」とか「と」とか「て」とか、とり出すことはできるが、實際の生きたことばとしては、必ず「ひよこが」とか「びーよびーよ」とか「とびだして」とかいうようにひとつのことばとして用いられている。一行幾字と器械的に揃えて書こうとするのは、繪本では無理である。

それから「そだてています」と、いう場合にそだてています」のように、おどり字を使つたのも見受けるが、幼児の繪本には、すべておどり字を避けた方がよいと思う。「たんぼぼ」「おてて」「きつつき」というように書くべきであらう。こういう點にも注意の行き届いた繪本とそうでないのがあ

X X

現代かなづかいのことは、まだ充分行われていないらしく「夕方」の「ゆう」と、ものを言うときの「いう」とが區別されていないかつたり、「お母さま方え」とあるかと思つて愛のこまやかさへ……」となつていたり、同じことばが新舊二様のかなで書いてあつたりする。「うぐひす」は「うぐいす」と書くはずであるが、ある繪本には「うぐえす」となつてゐる。「からす」などと共に、小鳥の繪があつて、そのわきに書いてあるので「うぐいす」(鶯)に違いないのであるが「うぐえす」とある。これは單純な誤植ではなく、「い」と「え」

の混同する方言による誤と思われる。實際そういう地方のことはあるが、幼児を對象にして作られた繪本に書くべきものではない。繪本のことは、なるべく純正なことばであつてほしい。

X X

次に繪本のことばづかひについて、二三、氣のついたことを考えよう。いつも問題になることであるが、「おうま」「おうち」「おやま」「おやね」などと物の名に「お」をつけたのが多い。「お米」「おしろ」というから「粉」にも「おこな」といつてもよいわけであらうが、こうなると、もうわずらわしい。關西に多く用いられているように「お豆さん」「お粥さん」まで行くことになつて、これはどうかと思う。「おてつないで」のようなのは、「てつないで」といつては言いくいところから、止むを得ないであらうが、とにかくなくんでもかでも「お」さえ附けて言えば、よいことばだと考えることだけは早く改めねばならぬと思う。

「……しておくれ」「……かしておくれ」の「おくれ」は、「くれる」という敬意のこもつたことばに、さらに「お」がついてるので、一層丁寧な言い方というわけであるが、しかし今日はほとんど敬語の意味は失われようとしているのではなからうか。同じ文の中で、きまつた相手にむかつて、例えば小鳥とか虫とかに對して、「めしあがれ」といつたような丁寧な言い方をして、すぐ次に「しておくれ」といつたことばが出て来るようなのは、少し混同の意味があると思われ

る。ぜんざいな言い方と丁寧な言い方が混同して使われるのは、あまり氣持のよいものではない。

それについて問題となるのは「お讀みなさい」と「讀みなさい」のちがひである。「お返しなさい」「返しなさい」など同じような言い方がいくつもある。相手によつては「お讀みな」とも「お讀み」とも言う。「お讀みなさい」「お返しなさい」が最も正式のことばづかひであることはさうまでもない。「讀みなさい」「返しなさい」は、もともと生きたことばとしては、どこにも存在しなかつたのであるが、おもに學校などで、東京のことばづかひをよく知らない地方出の學校の先生によつて、使ひ出され、やがて小學校の讀本にも、とり入れられて普及したことばだといわれている。それで「なさい」よりもかえつて「お讀み」という方が敬語としてよいのだという説もある。ことばは生きものであるから、時代により環境によりいろいろに變化して行くことは止むを得ない。ただなるべく、正しく美しいことばを磨きあげるようにしたいものである。

現に私が度々使つてゐる「行く」ということばであるが、繪本を見ていると「がつこうへゆくみち」とか「とんでゆく」とあつたり、また「かけていく」ともある。「ゆく」か。「さく」か。「おてつないで、のみちをゆけば……」となつてゐる本もある。小學校の「こくご」には「おてつないでのみちをいけば……」となつてゐる。電車や汽車の「行先」も「ゆきさき」か「いきさき」か。「行く」ということばは

古い本では二た通りになつてゐる。例えば萬葉集を見ると「大伴の御津のとまりに舟はてて龍田の山をいつか越え伊加む」(卷十五)「ますらをのゆぎとり負ひて出でて伊氣は別れを惜しみなげきけむ妻」(卷二十、大伴家持)というように、はつきりと「いく」となつてゐる。しかし「ゆく」とあるのが多いことは言うまでもない。文語文としては「ゆく」であるが今日のはなしことばとしては「いく」が用ゐられるので、子供のことばとしては「いく」が正しいことになる。「夢」は古くは「ゆめ」と言つてゐたが、今では「ゆめ」である。また「言う」というのも、「來いとゆたとて、ゆかりよか佐渡へ」の民謡にあるように「ゆつた」という人が現在でもあるが、これは正しいことばづかいとは言えない。

あまりこまかいことばのせんさくに入つてしまつたのであるが、繪本のことばは、簡單ではあつても、詩味の豊かなものがほしい。「ワンワン」とか「ブーブー」とか擬聲語だけを繪のわきに書き添えたり、ただ「きしや」とか「ひこうき」とか、單語の羅列だけのものもあるが、幼児は、それらのことばから、いろいろのものを遠想してゐるのであるが、もつと幼児にふさわしい、短いことばがほしい。長いおはなしでなく、またむづかしい詩でもなく、とにかく繪にびつたりと合つた生きたはなしことばが昔である、どんなにうれしいであらう。いつかキンダーブックでみたことばなどは、まことに楽しいものであつた。

むらの ようちえんは  
ひが いたばい あたる

ごさの おさしき  
くさの ごちそう

やぎも おとなしい

おきやくさま (第二集第一編)

これは詩である。しかし獨立の詩ではなくて、川島はるよ畫伯の繪を生かすためのことばである。繪に見入つてゐる幼児が、このことばを耳からきかされて、「そう楽しく目をはたかせて繪の世界に入つて行くのである。

あおい うみに

もぐつて ごらん

ほら おさかなの

はなしごえが

きこえるよ (第二集第五編)

これも印象の深いことばである。本當に子供の心から出たことばで、生き生きしてゐる。このことばを聞く者の身内がなんとなく、ほのぼのとなくなつてくるようなことばである。鈴木壽雄畫伯の繪も、童心の溢れたものであるが、畫と文とがたがいに助け合つて一そうよいものにしてゐる。

また同じキンダーブックのある集の裏表紙に幼児の繪があつて、次のことばが出てゐる。

① てを あらうて

② ぼうし を かぶつて

③ くつ を はいて

④ せんせい さようなら

⑤ あしたも うれしい ようちえん

みんなで いつしよに あそびましよう

これといつてむづかしいことばでもなんでもない。幼児の生活そのままが書かれているだけで、平凡な日常のことばにすぎない。ところがこれが一こまづつの繪に伴なわれているために、一種のリズムまでが出て来て、たのしい、うれしい幼稚園の生活を讚美したことになる。ふしぎといえばふしぎ、このことばの祕密を考えていただきたい。

繪本のことばはむずかしい。しかし、それは、生きたことばの生命を把握しさえすればよい。結局、幼児の生活に親しんで、それをわがものとすればよい。しかし、このわかりきつたような眞理が案外忘れられていて、世の多くの繪本には詩でも文でもなく、まるでかわらぬかけらのような、やくざな文字がとびはねている。そして、純眞な幼児をきずつけ、さいなめている。まことに恐るべきことではないか。

## ○保育歌の募集について

保育者の會合の時にみんなで歌える保育歌——保育の

聖い尊いことを表明したもの——を募集する。

一等 三千圓

二等 二千圓

三等 千圓

來年二月中を歌詞募集締切とし、來年三月までに作曲して四月に發表の豫定である。保育従事者の方々の奮つて應募せられんことを希望する。

全國保育連合會